

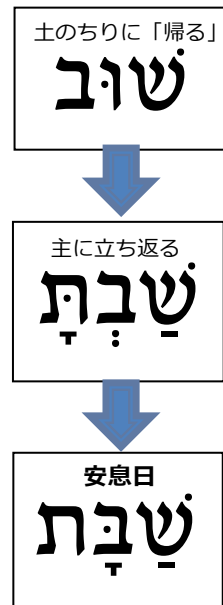
「安息日の癒やし」

ルカの福音書 13:10~17

はじめに

前回は「悔い改め」と訳されているシューヴのヘブル語本来の意味について述べましたが、それに続く今回はシャバット(שַׁבָּת)「安息日」についての解き明かしとなっています。「悔い改め」と「安息日」この二つの言葉にはヘブル語ならではのつながり、結びつきがあり、つまりヘブル語でなければ知りえない、聖書に施された仕掛け、技巧が存在し、それを知ることで、今日の内容に秘められた神の奥義があり、それが一体どのようなものであるのかがわかるようになっていきます。

前回お伝えした「悔い改める」という意味のヘブル語シューヴ(שׁוּב)の基本形はこうですが、これが完了形(二人称単数)になるとシャヴター(שָׁבַת)となり、発音こそ違えど、文字としての綴りは今日扱う「安息日」シャバット(שַׁבָּת)と同じになります。そしてこのシャヴターが聖書で最初に使われた箇所を見てください。



申命記【新改訳 2017】

4:26 私は今日、次のことで、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。あなたがたは、ヨルダン川を渡って所有しようとしているその地から追われ、たちまち滅び失せる。そこで、あなたがたは長く生きるどころか、すっかり根絶やしにされる。

4:27 また、主はあなたがたを諸国の民の中に散らされ、あなたがたは主が追いやる国々の中で、ごくわずかな者として生き残ることになる。

4:29 しかしそこから、あなたがたがあなたの神、主を探し求め、心を尽くし、いのちを尽くして求めるとき、あなたは主にお会いする。

4:30 こうして終わりの日に、これらすべてのことがあなたに臨み、あなたが苦しみのうちにあるとき、あなたは、あなたの神、主に立ち返り、御声に聞き従う。

この預言はモーセが当時のイスラエルの民に語ったものですが、内容としては「終わりの日」についてのものとなっています。要するに何が言いたいのかと申しますと、前回の「悔い改め」と今回の「安息日」についてのメッセージをヘブル語を使って結び合わせるならば、ここには「終わりの日」についての神のご計画、特にイスラエルのシューヴ、主への「立ち返り」「悔い改め」ひいてはイスラエル王国の再興がどのようにして成就、実現するのかという神のご計画が秘められているということです。ですから今日の内容を過去の出来事としてではなく、また今の自分や周りの状況に当てはめるのでもなく、このように原語であるヘブル語の聖書が指し示すように、ぜひ「終わりの日」についてのイスラエルについての神のご計画として捉えていただきたいと思います。

1. 十八年

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:10 イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。

13:11 すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全く伸ばすことができない女の人があった。

13:12 イエスは彼女を見ると、呼び寄せて、「女の方、あなたは病から解放されました」と言われた。

13:13 そして手を置かれると、彼女はただちに腰が伸びて、神をあがめた。

前回は「シロアムの塔が倒れて死んだ十八人」についての話がありましたが、それに続くここでは「十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全く伸ばすことができない女の人」が登場します。この「十八」という数の一致には秘められた意味があると前回述べました。ではもう一度この「十八」という数が聖書で最初に使われた箇所を見てみましょう。

士師記【新改訳 2017】

3:12 イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねて行った。そこで主はモアブの王エグロンを強くして、イスラエルに逆らわせた。彼らが主の目に悪であることを行ったからである。

3:13 エグロンはアンモン人とアマレク人を彼のもとに集め、イスラエルを攻めて打ち破った。彼らはなつめ椰子の町を占領した。

3:14 こうして、イスラエルの子らは十八年の間、モアブの王エグロンに仕えた。

これはエジプトからカナン¹の地へイスラエルを連れ上ったモーセ、ヨシュアを知らない世代が起こった頃の話です。「イスラエルの子らは十八年の間、モアブの王エグロンに仕えた」とあります。その理由は彼らが「主の目に悪であることを重ねて行った」ためとあり、そこに聖書で最初の「十八」という数があります。このように「十八」とは墮落したイスラエルが異国の支配を受ける、その奴隷となるという意味を持った数なのです。ちなみにこの時イスラエルを支配した「エグロン(עגרון)」はエーゲル(עגל)「子牛」という意味の言葉を由来とし、そしてそれは本来、イスラエルが初めて偶像礼拝を行ったあの忌むべき「金の子牛(出32:4)」を指し示す言葉なのです。つまりこの「エグロン」とは人となった偶像、すなわち自らを神とする人、いわゆる現人神(あらひとがみ)を意味し、その実体は終わりの日に現れる悪魔サタンの子、黙示録の獣とも呼ばれる反キリストを指しています。ですからこの「十八」という数には、エルサレムの「十八」人が死ぬというこの出来事には、大患難時代とも呼ばれる終わりの日、エルサレムは獣、反キリストの手に落ちる、獣に支配されるという事実が「型」として指し示されているのです。

ちなみに列王記の時代、すなわちイスラエルが北と南に分裂していくという時代にもイスラエルが再びこの金の子牛を拝むように仕向けた王がいました。その名をヤロブアムと言います。実は彼こそがイスラエルをそそのかし、イスラエルを北と南に分断させた張本人でした。

I 列王記【新改訳 2017】

12:28 そこで王は相談して金の子牛を二つ造り、彼らに言った。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなたの神々がおられる。」

12:29 それから彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。

12:30 このことは罪となった。民はこの一つを礼拝するためダンまで行った。

12:31 それから彼は高き所の宮を造り、レビの子孫でない一般の民の中から祭司を任命した。

このようにしてヤロブアムは北イスラエルを支配する王となりました。つまりこのヤロブアムもまた終わりの日に現れる獣、反キリストの影、その「型」といえる存在なのです。そして注目していただきたいのは彼の治世の「**十八年**」についての記述です。

I 列王記【新改訳 2017】

15:1 ネバテの子**ヤロブアム**の**第十八年**に、アビヤムがユダの王となり、

15:2 エルサレムで三年間、王であった。彼の母の名はマアカといい、アブサロムの娘であった。

15:3 彼は、かつて自分の父が行ったあらゆる罪のうちを歩み、彼の心は父祖ダビデの心のように、彼の神、主と一つにはなっていなかった。

15:4 しかし、ダビデに免じて、彼の神、主は、彼のためにエルサレムに一つのともしびを与えて、彼の跡を継ぐ子を起こし、エルサレムを堅く立てられた。

金の「子牛」を造り、民にこれを拝ませた北イスラエルの悪王ヤロブアム、彼の治世の「**第十八年**」に南ユダにもアビヤムという悪王が立ち三年間支配しますが「主は、彼（ダビデ）のためにエルサレムに一つのともしびを与えて、彼の跡を継ぐ子を起こし、エルサレムを堅く立てられた。」とあります。これは歴史的にはアサという王を指しますが、預言的な解釈としてはダビデの子と呼ばれるメシア、イエシュアを指しており、世の終わりの大患難の三年半、その終わりに地上に再臨され、エルサレムに帰還され、御国を堅く立てられるメシア、王なる主イエシュアを指し示しています。それが「**ヤロブアムの第十八年**」という時に記されているのです。このように、「**十八**」年という数には生ける偶像とも言える現人神、黙示録の獣と呼ばれる反キリストがイスラエルを支配し、その後に「**ダビデ**」の子すなわちメシア、まさに「**エルサレムに一つのともしび**」となられるイエシュアが来られ、「御国」を「**堅く立てられ**」るという、世の終わりにおける神のご計画が指し示されており、それがこの「**十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全く伸ばすことができない女の人**」をイエシュアが解放されるというという出来事には「型」として表されているのです。

そしてこの女性は「**腰が曲がって**」いたとありますが、「曲げる、かがむ」という意味のヘブル語カーフアフ(קָרַף)が使われています。この言葉の最初の言及を見てください。

詩篇【新改訳 2017】

57:5 神よあなたが天でああなたの栄光が全世界であがめられますように。

57:6 彼らは私の足を狙って網を仕掛けました。私のたましいはうなだれています。彼らは私の前に穴を掘り自分でその中に落ちました。セラ

57:7 神よ私の心は揺るぎません。私の心は揺るぎません。私は歌いほめ歌います。

57:8 私のたましいよ目を覚ませ。琴よ堅琴よ目を覚ませ。私は暁を呼び覚まそう。

この詩篇はダビデがサウル王の殺意の手から逃れ、彼が洞窟に隠れている時を思って書かれたものです。このように、カーファフとは本来、狭い洞窟の中で腰が、身体が曲がるというよりも、心が「**たましい**」が「**うなだれています**」という意味の言葉なのです。つまりそれは恐れや不安、失意や失望といった意味の言葉であり、自身の敵によって危機的状況にあることを指す言葉なのです。終わりの日、反キリストによって滅ぼされそうになるイスラエルの残りの者と呼ばれるユダヤ人たちは、まさにこのような状況となります。しかし彼らはその中でイエシュアこそがまことのメシアであることに目が開かれ、まさに目を覚まされ、新しい時代の「**暁**」夜明けをもたらす御方であるイエシュアを呼び求めるようになるのです。それが上記の詩篇にある「**私のたましいよ目を覚ませ。琴よ琴よ目を覚ませ。私は暁を呼び覚まそう。**」という一節には表されているのです。そしてイエシュアの御前で「**腰が曲がって**」いた、うなだれていた女性がイエシュアによって癒され、「**神をあがめた**」とあるように、イスラエルは主によってシューヴ、悔い改めへと導かれ、その御国は立ち上がるのです。女性は「**ただちに腰が伸びて**」とあり、ここに使われているヘブル語はやはりクーム(קום)で、それは前回は述べたように人の身体のみがえりと、ダビデの王国イスラエルの再興「その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を**起こす**。(アモス 9:11)」ことを意味する言葉です。このように、ヘブル語の視点で捉えるならば、イエシュアのこの癒やしの御業は、終末における神のご計画を指し示し、それはすなわち反キリストによるイスラエルを襲う大患難と、そこに救いをもたらす主イエシュアの地上再臨、そして再興されるイスラエル王国、千年王国、メシア王国とも呼ばれる「**神の国**」の完成が指し示されているのです。

2. 安息日

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:14 すると、会堂司はイエスが安息日に癒やしを行ったことに憤って、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。だから、その間に来て治してもらいなさい。安息日にはいけない。」

13:15 しかし、主は彼に答えられた。「偽善者たち。あなたがたはそれぞれ、安息日に、自分の牛やろばを飼葉桶からほどき、連れて行って水を飲ませるではありませんか。」

13:16 この人はアブラハムの娘です。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日に、この束縛を解いてやるべきではありませんか。」

イエシュアに対して会堂司が憤った理由は以下の戒めによるものでした。

出エジプト記【新改訳 2017】

20:8 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。

20:9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。

20:10 七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。

20:11 それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。

イエシュアは「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。(ヨハネ 5:17)」と言っておられますから、この女性に対する癒しの御業はイエシュアの働きと言えます。ですからこの戒めによると確かにイエシュアの御業は律法違反となります。そしてイエシュアが糾弾されたように「安息日に、自分の牛やろばを飼葉桶からほども、連れて行って水を飲ませる」こともまた同じく違反しています。ではイエシュアは「お前だって違反してるんだから私だって…」というような、まるでうちの家でよくやる喧嘩のような、そんな考えでイエシュアは安息日に癒しの御業をなさったのでしょうか。そうではなく、「安息日」シャバットという言葉の意味、その概念が会堂司とイエシュアとでは全く異なっていたためにこのようなことが起こったのです。会堂司はこれを働いてはいけない、休まなければならない日として捉えていましたが、イエシュアはこのシャバット(תַּבַּת)を、今日の冒頭で述べたようにシューヴ(שׁוּב)「悔い改める」すなわち主に立ち返る、そして再興、回復するという意味を秘めたものとして、そしてそれが終わりの日のイスラエルにおいて起こることを指し示して女性の十八年間曲がっていた腰をクーム、まっすぐに伸ばされたのです。さらに、このシューヴを語源とするシェヴィート(שִׁבּוּת)という名詞もまたシャバットに酷似しており、これは本来「捕らわれた娘たち(民数記 21:29)」という意味の言葉です。また同様にシェヴート(שִׁבוּת)という言葉もあり、これは「帰る、元どおりにする」という意味です。以下の最初の言及を見てください。

申命記【新改訳 2017】

30:3 あなたの神、主はあなたを元どおりにし、あなたをあわれみ、あなたの神、主があなたを散らした先の、あらゆる民の中から、再びあなたを集められる。

30:5 あなたの神、主はあなたの先祖が所有していた地にあなたを導き入れ、あなたはそれを所有する。主はあなたを幸せにし、先祖たちよりもその数を増やされる。

30:6 あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心に割礼を施し、あなたが心を尽くし、いのちを尽くして、あなたの神、主を愛し、そうしてあなたが生きるようにされる。

30:7 あなたの神、主はあなたの敵に、あなたを迫害した、あなたを憎む者たちに、これらすべてののろいを下される。

このようにシャバットには、正確にはこれを構成する文字の組み合わせには、イスラエルを再び「元どおりにし」以前よりもさらに「その数を増やされ」るという神のご計画が指し示されている、秘められているのです。そしてそれは「終わりの日」に成就します。まさにこう預言されているとおりです。

申命記【新改訳 2017】

4:30 こうして終わりの日に、これらすべてのことがあなたに臨み、あなたが苦しみのうちにあるとき、あなたは、あなたの神、主に立ち返り、御声に聞き従う。

「終わりの日」イスラエルはサタンの子、反キリストの支配、迫害によって大いに苦しみますが、再臨のイエシュアがこれを打ち滅ぼし、イスラエルを解放され、救い出され、そして御国が、その国民としてのイスラエルが起こされます。彼らは「イスラエルの残りの者」と呼ばれ、主に選び出される者たちです。

イエシュアは「安息日に、この束縛を解いてやるべき」だと言われましたが、ここに使われているマーサル(מָרְסַל)の本来の意味も解放、自由というようなものではなくそれは「選抜、選び出す」という意味で召集、徴兵を表す言葉なのです(民数記31:5)。そしてそのような「終わりの日」の神のご計画を指し示す日、それが、それこそがシャバット「安息日」なのです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:17 イエスがこう話されると、反対していた者たちはみな恥じ入り、群衆はみな、イエスがなされたすべての輝かしいみわざを喜んだ。

主イエシュアの御業に反対する者、これを信じず、受け入れない者はみな恥を見ます。今日のユダヤ人の多くがこの状態にあり、やがて彼らは大きな患難の中でまさに恥を見ます。しかし終わりの日には「イエスがなされたすべての輝かしいみわざを喜」ぶ者へと変えられ、主に立ち返らされ、まさにシューヴというべき主の御業はなされ、真の「安息日」シャバットが成し遂げられるのです。

「群衆はみな、イエスがなされたすべての輝かしいみわざを喜んだ。」ここに使われている「喜ぶ」という意味のサーマハ(שָׂמַח)は本来、離れ離れになっていた兄弟が再会し、心から喜ぶことを意味する言葉です(出エ4:14)。つまりそれはイエシュアとの再会である、イエシュアの再臨を喜ぶことを意味します。私たち教会もイスラエルにつながる者としてこのイエシュアとの再会、再臨を喜びとし、その日を待ち望む者です。そしてそれはIテサロニケ人への手紙4:16~17に預言された、携拳と呼ばれる形で空中において成就します。本当にその日、その時が待ち遠しいです。そしてその後、私たちはイエシュアとともに地上に再臨し、イスラエルの残りの者と再会することになります。この再会、すなわち「イエスがなされたすべての輝かしいみわざを」ともに喜ぶ者となりましょう。イエシュアの御名、その癒やしと解放に表された、救いの御業によって。